

湧別川水系河川整備計画（原案）
（国管理区間）

平成 22 年 7 月

北 海 道 開 発 局

標高値は、2000 年度改正の新基本水準点に基づき表示している。

目 次

1. 河川整備計画の目標に関する事項	1
1-1 流域及び河川の概要	1
1-2 河川整備の現状と課題	6
1-2-1 治水の現状と課題	6
(1) 治水事業の沿革	6
(2) 洪水の概要	9
(3) 治水上の特徴と課題	12
1-2-2 河川の適正な利用及び河川環境の現状と課題	13
(1) 現況の流況と水利用	13
(2) 水質	15
(3) 動植物の生息・生育状況	18
(4) 魚類の遡上環境等	20
(5) 河川景観	21
(6) 河川空間の利用	22
(7) 河川の適正な利用及び河川環境上の課題	23
1-3 河川整備計画の目標	24
1-3-1 河川整備の基本理念	24
1-3-2 河川整備計画の対象区間	25
1-3-3 河川整備計画の対象期間等	27
1-3-4 洪水等による災害の発生の防止又は軽減に関する目標	27
1-3-5 河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する目標	28
(1) 流水の正常な機能の維持に関する目標	28
1-3-6 河川環境の整備と保全に関する目標	28
(1) 河川環境の整備と保全に関する目標	28
(2) 河川空間の利用に関する目標	28
2. 河川整備の実施に関する事項	29
2-1 河川工事の目的、種類及び施行の場所	
並びに当該河川工事の施行により設置される河川管理施設の機能の概要	29
2-1-1 洪水等による災害の発生の防止又は軽減に関する事項	29
(1) 洪水を安全に流下させるための対策	29
(2) 内水被害を軽減するための対策	33
(3) 広域防災対策	34
2-1-2 河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する事項	35
2-1-3 河川環境の整備と保全に関する事項	35
(1) 多様な生物の生息・生育・繁殖の場の保全と形成	35
(2) 魚類等の移動の連続性	36
(3) 河川景観の保全と形成	36

(4) 人と川とのふれあいに関する整備	37
2-2 河川の維持の目的、種類及び施行の場所	38
2-2-1 洪水等による災害の発生防止又は軽減に関する事項	38
(1) 河川の維持管理	38
(2) 危機管理体制の整備	44
(3) 災害復旧	48
2-2-2 河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持 並びに河川環境の整備と保全に関する事項	49
(1) 水質の保全	49
(2) 水質事故への対応	49
(3) 渇水への対応	49
(4) 河川空間への適正な利用	49
(5) 河川美化のための体制	50
(6) 地域と一体となった河川管理	50

1. 河川整備計画の目標に関する事項

1-1 流域及び河川の概要

「北海道の地名^注」によれば、湧別川という名はアイヌ語の「イペ・オ・イ」（魚・豊富である・所）に由来している。

湧別川は、その源を北海道紋別郡遠軽町の天狗岳（標高 1,553m）に発し、山間部の遠軽町白滝を流れ、丸瀬布で武利川が合流し、遠軽市街において平野部に出て生田原川を合わせ、湧別町においてオホーツク海に注ぐ、幹川流路延長 87km、流域面積 1,480km² の一級河川である。その流域は、オホーツク地方の中心地の一つである遠軽町と水産資源が豊かなオホーツク海に面した湧別町の 2 町からなり、オホーツク地方における社会・経済・文化の基盤をなしている。

流域の土地利用は、山林等が約 75%、原野・牧場等が約 14%、耕地は畑作が中心で約 10%、宅地等の市街地が約 1%となっており、森林資源などに恵まれている。

また、流域内は酪農を中心とした農業の他、林業・木材産業、水産業が盛んで、特に河口の湧別町は全国有数のホタテの産地となっている。

注) 「北海道の地名」：山田秀三著

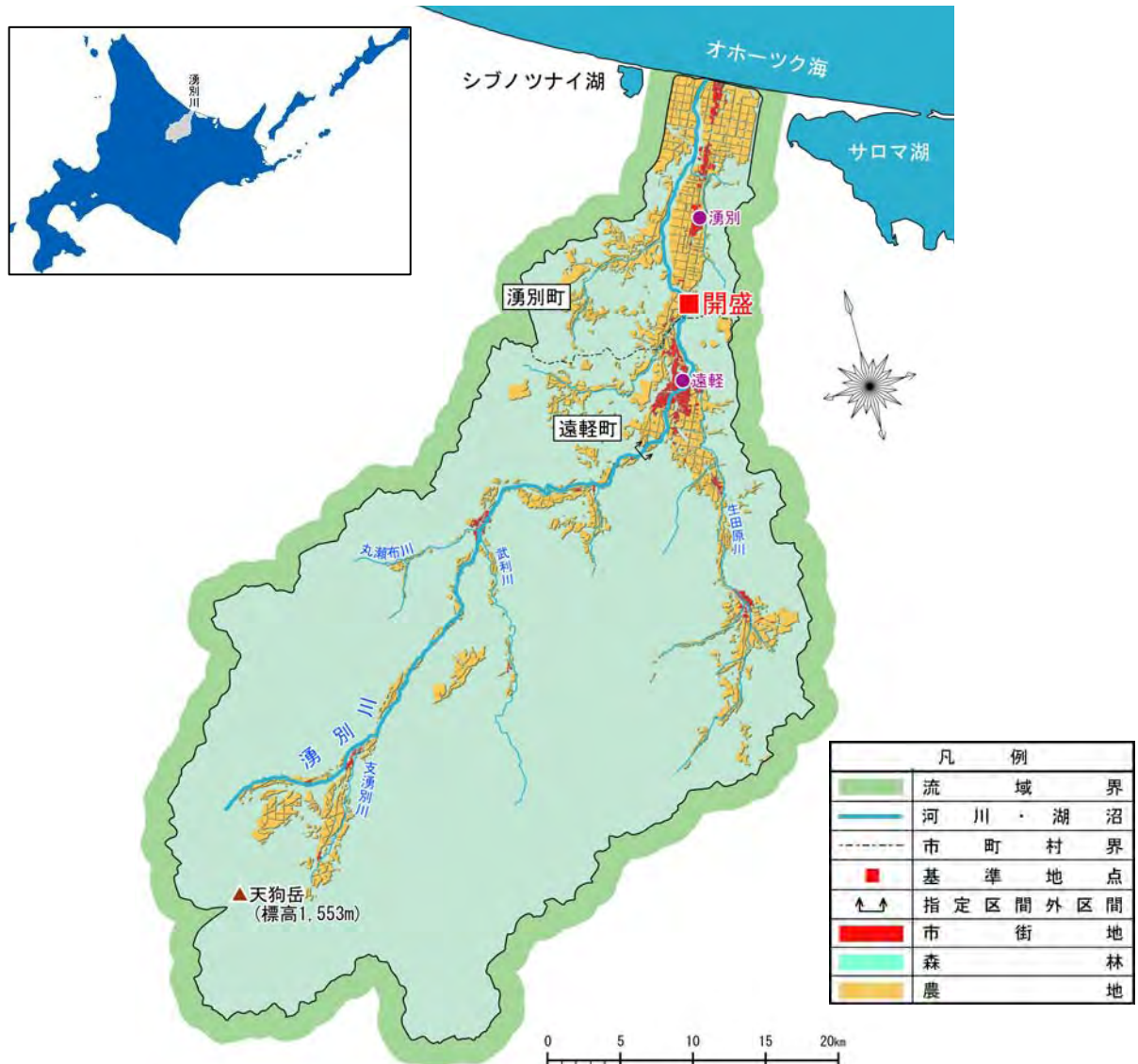


図 1-1 湧別川流域図

流域の気候は、オホーツク海側の気候区分に属し、梅雨や台風の影響を受けることが少ない。流域の年間降水量は全国平均約 1700mm に対し約 800mm と降水量が少ない地域である。また、オホーツク海は冬期に流氷が接岸する海であり、気温は流氷接岸期を含む 1～2 月に最も低くなる。

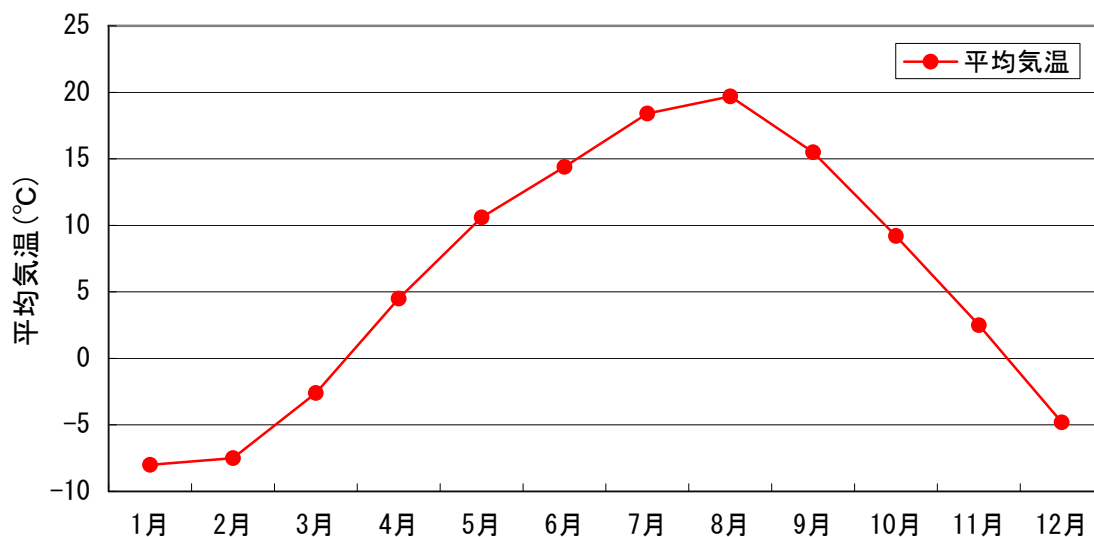


図 1-2 遠軽観測所の月毎の平均気温 (平成元年～平成 20 年)

出典：気象庁アメダス

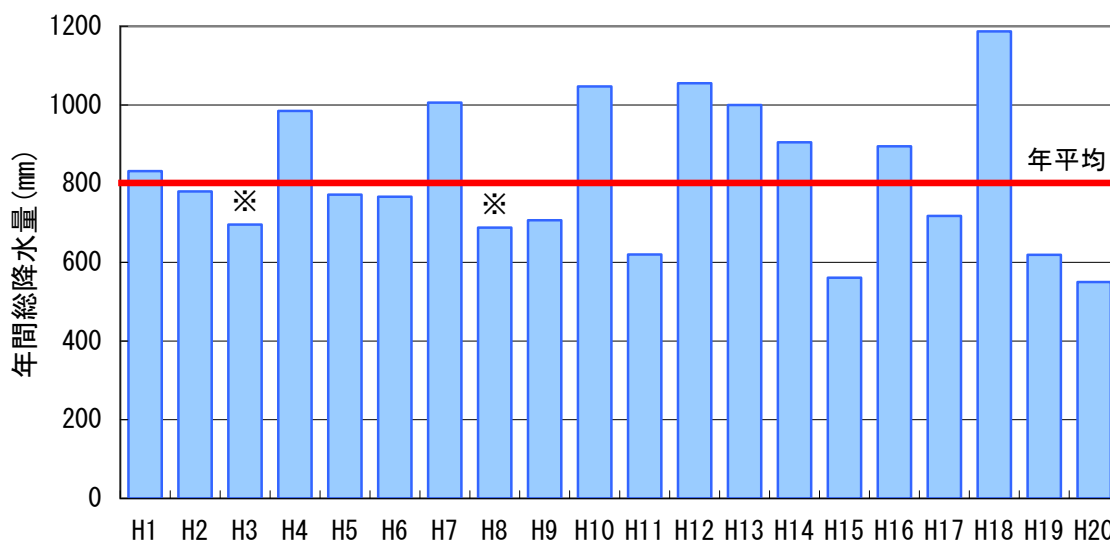


図 1-3 遠軽観測所 年間総降水量の経年変化 (平成元年～平成 20 年)

出典：気象庁アメダス

「※」は降水量に一部欠測がある年

流域の地形の大部分は山地、丘陵地であり、低地は主に最下流部に分布する。上流は天狗岳(1,553m)、雄柏山(1,268m)、支湧別岳(1,688m)などの急峻な大起伏山岳地形が広がり、これらに囲まれた白滝台地周辺は、段丘面と周氷河性緩斜面が発達し標高 500m～800m の小起伏山地となっており、斜面の傾斜も急勾配である。

湧別川中流左岸に広がる流域及び生田原川流域は、標高 200～300m の大起伏丘陵地(遠軽丘陵地、佐呂間丘陵地)となり、山稜は比較的平坦で湧別原野と呼ばれている。

段丘、沖積層の分布する平坦地は、河川沿いに細長く分布するが、遠軽、開盛(かいせい)でやや広くなり、湧別低地を形成する。海岸平野は、サロマ湖、シブノツナイ湖に挟まれた低地で、河口付近には湿地が形成されている。

湧別川は全国有数の急流河川であり、河床勾配は、源流から武利川合流点までの上流部は 1/100 以上の急勾配となっている。武利川合流点から生田原川合流点に至る中流部においても 1/250 程度の急勾配となっており、流域の中心市街地である遠軽市街において川幅が非常に狭い箇所も存在する。生田原川から河口までの下流部では 1/300～1/500 程度、河口付近が 1/800 程度となっているほか、川幅が広く砂州が形成され、滞筋も変動し網状に流下している。



(出典：土地分類図(北海道VI 網走支庁)
財団法人日本地図センター発行)

図 1-5 地形分布図

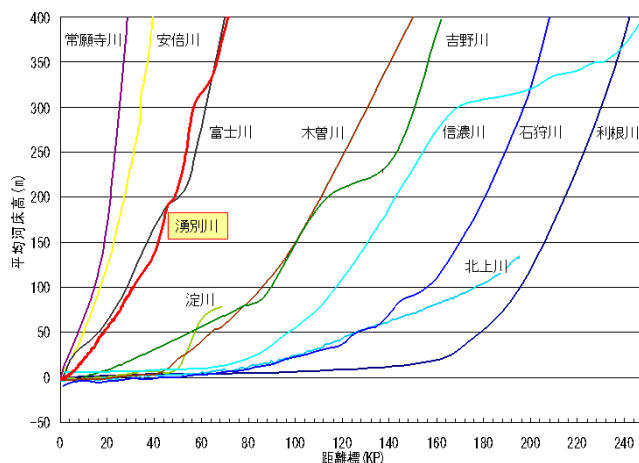


図 1-4 全国の河川の勾配



網状に流れる湧別川

流域の地質は、主に半固結—固結堆積物及び火山性岩石から構成されている。海岸沿いの低地は砂礫が分布し、それが内陸山地の河谷沿いにのびている。

中流の丘陵地には、砂岩・泥岩の互層及び火山性岩石の流紋岩等が分布している。上流の山地には半固結—固結堆積物の粘板岩等が分布している。これを覆って火山性岩石の軽石流堆積物が丸瀬布から上流域に分布している。生田原川上流の右岸域及び武利川最上流域には火山性岩石の凝灰岩が分布している。源流域の天狗岳周辺には安山岩が分布している。花崗岩などの深成岩類は最上流域山地に分布している。



(出典：土地分類図(北海道VI 網走支庁) 財団法人日本地図センター発行)

図 1-6 地質図

流域の主要な交通網は、網走市から^{あぼしり}稚内市に至る国道 238 号、北見市から^{わかかない}佐呂間町、旭川市方面に通じる^{あさひかわ}国道 333 号、遠軽町方面から北見市、^{きたみ}置戸町を通り、帯広市方面に通じる^{おけと}国道 242 号などがある。さらに、道央圏とオホーツク圏を結ぶ JR ^{おびひろ}石北本線(新旭川～網走)が通るほか、現在旭川と紋別を結ぶ高規格幹線道路の建設が進められているなど、湧別川流域はオホーツク地方と道央圏の交通の大動脈が縦断する地域である。

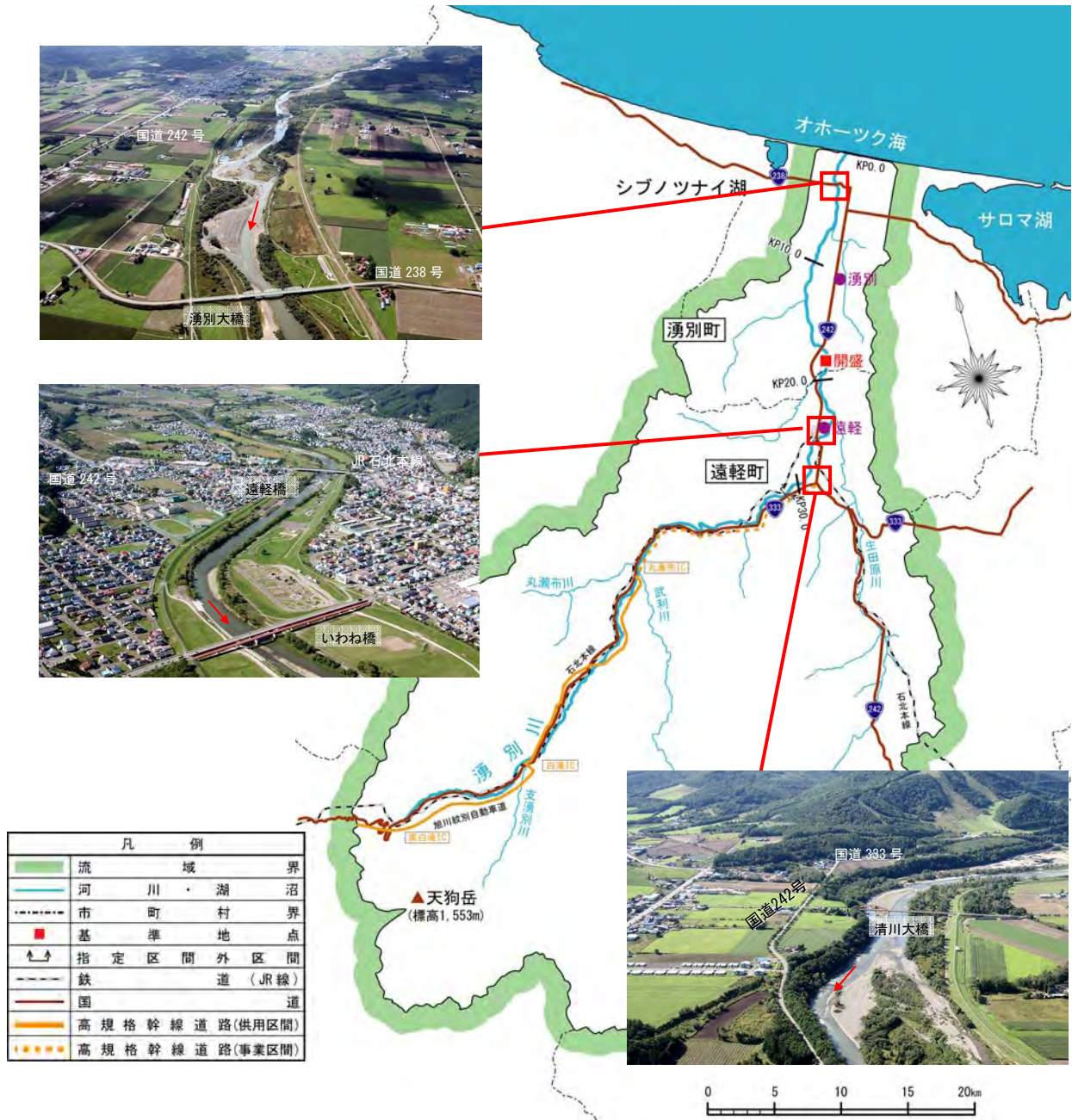


図 1-7 基幹交通施設位置図